保育所その他の入所児中，問題児の生活治療の技術に関する研究（2）

――問題行動児のグルーピングと保育上の取り扱いについて――

研究第9部　多　勢　豊　次

Ⅰ　目　　的

1）前回の研究(1)において――問題行動を2グループに分けるばあい、“引込思案”ならびに“神経質ないし不安・怖れ”のグループは妥当であるが、“攻撃的”ならびに“衝動的ないし落着きなし”のグループは妥当でないのではないか――ということが論ぜられたが、その点をさらに検討する。

2）分類された各グループにおける習癖ならびに身体反応のあらわれ方を検討する。

3）各グループ児にたいする保育上の取り扱い方を考察する。

Ⅱ　方　　法

1）第1表にみられるごとく、問題傾向中、A―1.1（攻撃）、1.2（反抗）、1.3（わがまま）と、C―1.14（衝動的）、1.15（おちつきなし）とが対応しているグループならびに、B―1.8（引込思案）、1.6（服従）、1.11（自発性欠如）と、D―1.12（神経質）、1.13（不安・怖れ）とが対応しているグループとそれから、A―C、B―Dの対応が必ずしもみられないグループ、つまり混合グループの3つに、目によつて大まかに分け（A―C：11名、B―D：11名、混合：12名）、各グループ毎にプロットした。（第1，2，3図参照）

2）分けられたグループ毎に、個々の習癖ならびに身体反応を算出した。

3）ただしA、B、C、Dについては、あくまで幼稚園における行動とし、クラス担任によつて評価されたもののみとした。一方、習癖と身体反応については、幼稚園ならびに家庭における行動とし、クラス担任と親の双方によつて評価されたものとした。

Ⅲ　結果と考察

1）A―Cグループ、B―Dグループ、混合グループの3つに分けてプロットした結果は、それぞれ第1図、第2図、第3図のとおりである。これらによると、A―C、B―Dの対応がみられ、又混合においてはみられないようである。（前の研究(1)においては、A―Cの対応が疑われた）。

2）各グループにおける習癖および身体反応の中、各グループの間に比較的差異のみられるものをあげてみると（第2表）、“少食”、“偏食”がB―DにおいてA―Cと対照的に多く、“小声”、“かゆがる”がB―DにおいてA―Cや混合よりも多い。一方、“指しやぶり”や“便秘”がB―Dにおいては他よりも少ないようにおもわれる。

3）A―C、B―Dとの対応は、異常行動あるいは不安徴候が各児童において、それぞれ異なつたパターンであらわれることを示していると考えられるから、日常保育においてそれらの子どもを治療的にとり扱うばあいは、A―C、B―D、混合グループ児毎に、何らかの異なつた保育技術が必要とされるかも知れない。しかし心理治療的観点から各グループに共通していえることは、異常行動や不安徴候それ自体にたいしては、保育者が決して否定的態度や逆に肯定的態度をとることは好ましくない。前者は行動を神経症的に固着させ、後者は補強させてしまう。

4）今後の問題としては、より多くの児童に調査を行うこと、又、A、B、C、Dの問題項目の再検討を行うことが必要と考えられる。

第1表
Table 1. Problems in Each Group

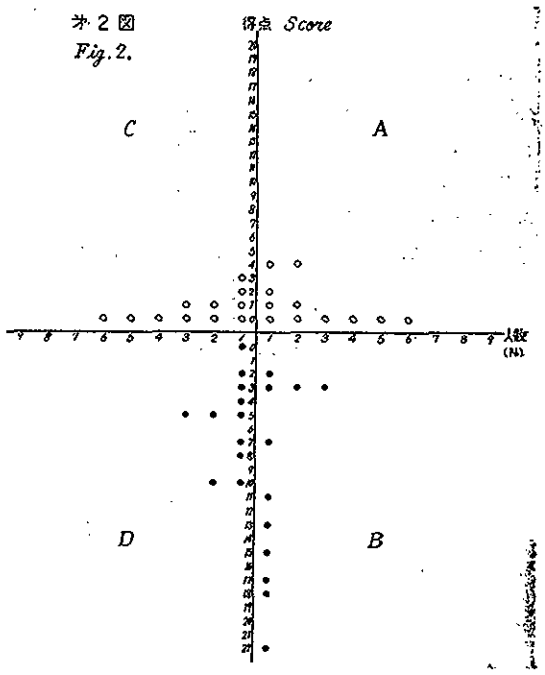
A		B	
1.1	乱暴をする すぐに他を非難する いじめる 仲間はずれにする 荒つぽい じやまをする すぐ腹を立てる よくけんかをする カンシヤクをおこしやすい かげ口をいう 悪口をいう つげ口をいう あたり散らす	1.8	仲間にはいれない 自分から話しかけられない 返事ができない 皆の前に出たがらない はずかしがる 人見知りがはげしい おとなしい子としか遊べない 友達がない 大ぜいの所に近づけない 傍観している事が多い 発表力がない 孤立している 人目を気にする 一人でいる事が多い 園に行きたがらない
1.2	反抗する 指図されることをきらう いうことを聞かない わざと他とちがつたことをする 強情である 協力しない すぐ向かつていく 口答えをする すねたりふくれたりする わざと口をきかない	1.6	言いなりになる すぐにゆずる きげんをとる 主張したり反抗したりしない ボスやリーダーにならない 素直すぎる
1.3	要求を通そうとする 自分勝手である めいわくなことを平気でする ゆずらない 思い通りにしようとする	1.11	自分から始めない 人の後にばかりついている 依頼心が強い あそびなどにさそえない 他と同じようなことばかりする 新しいことをあまりしない マネが多い 自信がない なかなか始められない

C		D	
1.14	がまんできない 待つていられない 持続できない すぐ手を出す 興奮しやすい はしやぎやすい ふざける	1.12	神経質である 用心深い ものごとを気にする とても慎重である 緊張しやすい きちようめんである 気持が敏感すぎる 気が小さい
1.15	落ち着きがない 気が散りやすい せかせかしている 気分が変りやすい 失敗が多い おしやべりである 不注意である	1.13	ビクビクしている 不安になりやすい こわがりやすい 心配しやすい 驚きやすい

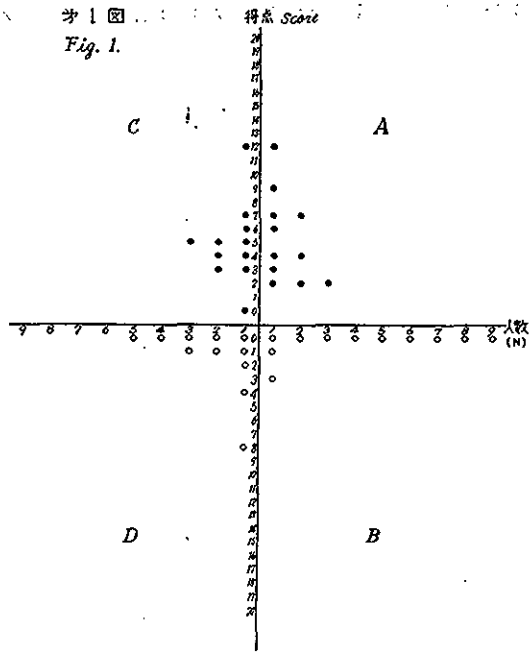
第2表
Table 2.

問題 Problem ＼ グループ Group	A—C	B—D	混合 Mixed
食事の量が少ない	2	9	6
偏食が多い	2	6	6
寝ながら歯ぎしりをする	1	3	3
性器をいじる	0	0	2
性的なことをよく口にする	0	0	2
指しやぶりをする	3	1	4
吃るくせがある	0	0	2
声が小さい	0	7	2
甘え声ではなす	0	3	2
早口にしやべる	1	0	3
間のびしたように話す	0	3	1
疲れたとか、だるいとかいう	0	0	2
ぜんそくがある	2	0	0
便秘をしやすい	2	0	3
よく、かゆがることがある	0	4	0

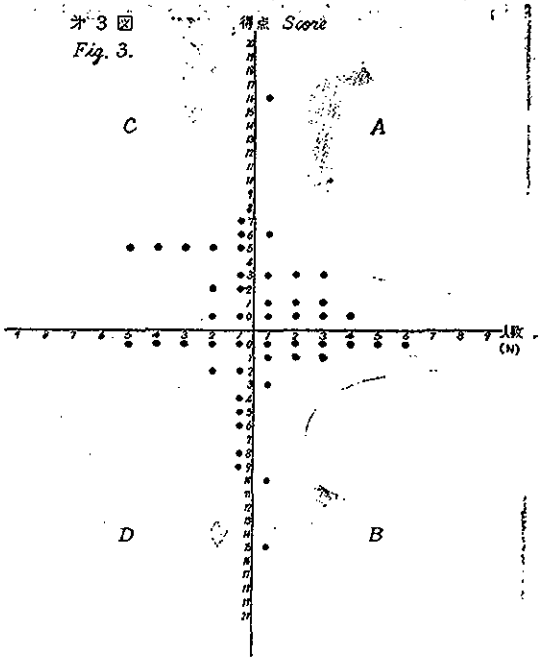
第2図
Fig. 2.



第1図
Fig. 1.



第3図
Fig. 3.



Ⅳ 要　　約

問題傾向（A）攻撃的、（B）引込思案、（C）衝動的、（D）怖れなどによつて、A—C、B—D、混合の3グループに分けられる可能性が見出され、又、習癖や身体反応のあらわれ方も各グループによつて差異があるらしいということが見出された。これらのことから日常保育における治療的取りあつかいが若干論ぜられた。

〔文　献〕

1) Becker, W. C., Krug, R. S. A. Cir cumple & Model for Social Behavior in children. Child Develpm., 1964, Vol. 35, No. 2, p. 374
2) Ruteer, M.: Classification and Categorization in Child Psychiatry. J. Child Psychol. and Psychiat., 1965, Vol. 6, No. 2, p. 79
3) 多勢豊次：保育所その他の入所児中、問題児の生活治療の技術に関する研究 (1)、日本総合愛育研究所紀要、2、1966、p. 193～196

A Study of Treating the Behavior Problems of the Kindergarten Children (2)

Toyoji Tase

It was found that 34 young children who have more behavior problems than other children in a kindergarten might be divided into three groups: Rebellions-Restless, Withdrawal-Fearful, and Mixed group; and also found that some of neurotic habits and psychosomatic reaction's were different in each group. A point of view for treating these children in the kindergarten was suggested.